4　T児の姿を通して（4～5歳児）

中野　淳子　　髙本　洋

4月当初、着替えや降園準備などの身支度に時間がかかることが多かった。他にも何人か時間のかかる幼児がいたので、のんびりした性格の一人と受け止め、かかわってきた。上着のファスナーをつけたり、運動着をズボンの中に入れたり、教師に要求してくることが多かったので、手伝っていた。しかし、6月になっても、同じ要求は続いており、何より自分でやろうとする姿勢がいつになっても感じられなかった。そこで、自分でやってみるように促し、手をかけないようにしたところ、要求することはなくなってきた。自分でやっているものだと思っていたところ、他の先生にお願いに行っていたのだった。人にしてもらう習慣がついているのではないか、自分でしようとする気持ちが弱いのではないかと感じた。

また、集団の場でも気になることがよくある。みんなで話し合いをしている時にいきなり立ってどこかへ行こうとしたり、グループ活動の後、片付けている時に一人だけふらふらしていたりと、周りの雰囲気や状況を感じ取れない様子が伺える。さらに、トラブルになった時に、相手と向き合えず、逃げてしまうことがある。その場でどうしたらよいのか、考える経験が足りないように感じる。その場その場で、自分で考え、行動できるようにと考え援助してきた。

事例1「だってお母さんが着替えないって･･･」１２月２日（木）４歳　さくら組

４歳児全員でお店やさんごっこに取り組みはじめて３日目。前日風邪のために欠席していたT児が登園してくるなり、教師に話しかけてきた。

T児　「T児昨日熱があったから、お母さんが『今日着替ませんって先生に言いなさい』って言ってた」

教師　「えっ、そうなの。でも熱は下がったんでしょ　熱がないなら着替えたら？」

T児　「だってお母さんが着替えないって○△※◇＃＊▼×@◆・・」

教師　「でも、着替えないとお店やさんできんよ。昨日T児くん休んでたから知らないと思うけど、みんな運動着でお店やってるんだ　T児くんもやるんだったら着替えよう」

T児　「だって着替たら寒いってお母さんが△※◇＃＊▼×@◆・・」

そこへA児が運動着への着替えを終え、教師のところへやって来た。

A児　「先生、もう着替えたよ」

教師　「お、早いね　あっ、ねえ、A児くん、運動着だったら寒い？」

A児　「全然！だって、床暖入ってるんでしょ」
教師　「そうだよ　外は寒いかもしれないけど、部屋の中は暖かいよね」
A児　「先生、もうお店の準備はじめていい？」
教師　「うん、いいよ。そうだ、先生も準備しなきゃ。T児くん、先生もお店の準備に行くね。」

そう言い残し、教師は材料準備のため、その場を離れた。しばらくして保育室に戻ると、黙々と着替えるT児の姿があった。着替え終わると、うれしそうな表情で、自分のお店に向かって走っていった。

○T児の学び

・幼稚園で活動する時には着替えなければならない。
・幼稚園内は床暖房が入っているから寒くない。
・着替えても寒くない。
・運動着に着替えると、体も心も軽くなる。
・母親に言われたことを守ることも大切だけど、自分で決めることも大切。

○教師の学び

・T児の自立のためには母親の影響が大きそう。
・実際に着替えることで、寒くないことを実感できた　→　やはり体で感じることが大切。
・T児にも、考えさせる場を与えることで、自分で考え、決定することができるんだ。
・T児が着替えた後、褒めるような言葉や寒くないことを確認するような言葉かあったら、より効果的だったかもしれない。

○今後に向けて

T児には、自分で考える場や自己決定の場を経験させていく必要がある。そして、自分でどうしたらいいか考えたことや自分で決めたことがよかったという満足感を味わわせることが大切である。

母親に言われていた「着替えをしないこと」と教師に言われた「着替えをすること」のどちらにしようか考えた結果、T児は最終的に自分で着替えることを選択した。この事例では、教師が一旦場を離れ、T児に考えさせる“間”を与えたことが効果的だったと考えられる。母親に言われたことも大切だけど、自分で判断することをしなければいけないと思ったのではないだろうか。

着替えたことで実際にT児は、心を開放されたように動き出している。この瞬間「着替えてよかった」ということを実感していると思われる。この時に、T児に一言声をかけることで、T児の行動を認めることができたのではないかと思う。「知識や親、兄から教えてもらったこと」より「自分で体験して得たもの、わかったこと」に価値を感じさせられるような言葉かけは必要である。自己決定にしても、からだで感じなければ自己決定できないと思うので、まずはいろいろなからだで感じる体験をさせていかなければならない。

事例２－①「先生、劇の台本貸してもらえますか？」　２月４日（木）

のびのび表現会に向けて、毎日劇の練習をしていた時期のことである。前日は参観日で、劇の様子も参観してもらっていた。その翌日の登園時、T児の母が担任のところまでやって来た。

T児母　「すいません、先生、劇の台本貸してもらえませんか？昨日の参観で見たところ、まだ全然覚えてないようなので、家で練習させたいのですが・・・」

教師　「えっ、台本ですか・・・あの、実はないんです　劇遊びしながら、その場で子ども達と一緒にセリフをつくっていったんで」

T児母　「はー、そーなんですかー」

教師　「はい　それに、まだ何回か練習もできますので、大丈夫ですよ」

T児母　「はー、わかりました」

そう言うと、帰っていった。

事例２－②「うん、わかった。」　２月５日（金）

T児が登園してくるなり、教師に話しかけてきた。

T児　「先生、神様のセリフの紙下さい」

教師　「えっ、セリフの紙って？」

T児　「神様のセリフ、まだ覚えていないから、家で練習する」

教師　「練習は幼稚園で毎日しているでしょ　あと５回できるから大丈夫だよそれに、B児ちゃんと一緒に言うところもあるから、一緒に幼稚園で練習しよう」

T児　「うん、わかった」

そう言うとT児は安心した様子で着替え始めた。

事例２－③「先生、ちょっと教えてほしいのですが・・・」　２月８日（月）

登園時、またもやT児の母がやってきた。

T児の母　「先生、ちょっと教えてほしいのですが・・・」

そう言うと、何やらメモをした紙と、ペンを取り出した。

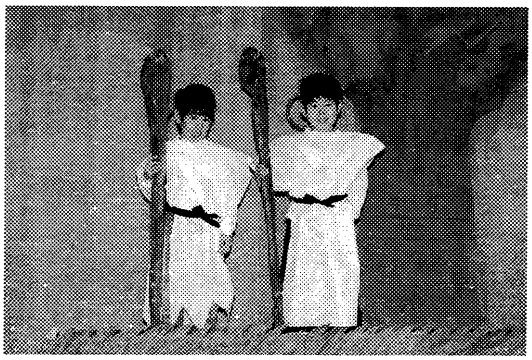
T児母　「ここの言葉までは覚えているらしいのですが、どうもこの続きが思い出せないらしくて・・・・。本人が不安がるものですから・・・」

そのメモ用紙には、T児が演じている神様のセリフが一部書かれていた。そこへ、T児と同じ神様役をしているB児がやってきた。

教師　「あっ、B児ちゃん、ちょうどいいところに。神様のセリフ言ってみてくれる」
B児　「ん、いいよ」
教師　「じゃあ先生ナレーターするね。『ある年の暮れのこと、神様が動物達にお触れを出しました』」
B児　「１月３日の朝、わしのところへ、新年のあいさつに来なさい。１番早く来たものから１２番目のものまで、一年交代で人間の世界を守らせることにしよう」
教師　「うん、OK、ありがと。・・・というセリフです」

児の母の方を向くと、一生懸命セリフをメモしていた。

T児母　「あ、ありがとうございます、『人間の世界を守らせることにしよう』ですね」
教師　「はい」



T児の母はホッとした表情であいさつをし、帰っていった。

本番が近づくにつれ、T児はセリフを大きな声で言えるようになってきた。本番も、セリフのいくつかは大きな声で言うことができたが、自信のないセリフはいきなり小さくなってしまい、バランスの悪い台詞回しになってしまっていた。一方同じ役のB児は、すべてのセリフを落ち着いてしっかりと言うことができていた。

○T児の学び
・練習をすれば覚えられる
・自信がつけば、大きな声で言うことができる
・幼稚園でみんなと一緒に練習すれば十分である

○教師の学び
・T児の母親はT児のことを心配しすぎて、手をかけすぎている
・T児本人は、素直に教師の言葉を受け入れることができる
・母親がT児に言わせていることがある。T児の自身の思いを出させたり、自分の思いを大切にしたりできるよう、援助していこう

○今後に向けて

事例では、T児が体で感じて得るものを先取りしてしまっている母親の姿が見て取れる。T児に自信をもってがんばってほしいという気持ちは教師側も同じであるが、自信のつけさせ方に問題があるように思う。T児の場合、普段の会話も語尾がはっきりせず、口をほとんど開けずにしゃべるので、言っていることが聞き取りにくい。本来なら「声をしっかり出す」「最後まではっきり言う」などの点に重点を置きたいところだが、家庭では「セリフを覚えること」に価値を置いているように感じられる。この時期、覚えられなくて当たり前なのに、覚えたことを家庭でも評価されるためか、T児は覚えていないことが不安になってしまっている。T児の母には、具体的にどうしたらよいのかを伝えていくことが効果的なのかもしれない。例えば、自信のつけ方はどう学んだかが大事であること。友達と何度も声を出しながらからだで学んでいく、みんなと一緒にやったらできると実感することが幼稚園で大事にしているということ。そして、母に「ここをほめるんだよ」ということを具体的に伝えていく。そして実践してもらう。母自身もからだで学んでいくことが大切である。

事例3「『ごめんなさい』って言えばいいんだよ。」 4月18日（月）5歳　つき組

朝の集いが始まろうとしていたときに、廊下でD児とC児が叩き合いのけんかをしていた。そこで教師が、なぜけんかになったのかを聞いていた。

教師　「Dちゃん、Cちゃんをどうしてたたいたの？」
D児　「だって、Cちゃんがぼくのほっぺを・・・」
教師　「Cちゃんそうなの？」
C児　「だって、Dちゃんがぼくをたたいた」
教師　「Dちゃん、Cちゃんをたたいたの？」

そこへ突然T児が横から口をはさんだ。T児はけんかの様子を見ていたようである。

T児　「『ごめんなさい』って言えばいいんだよ」

それを聞いたD児はC児に「ごめん」と謝り部屋へ帰った。C児も部屋へ帰っていった。

○T児の学び

・謝りさえすればその場を過ぎることができる。
・どっちでもいいから謝りさえすれば解決できると思っている。
・どうしてそうなったか原因を考えるよりも丸く収めることが大事。

○教師の学び

・T児は、なぜそうなのかということを考える経験が不足しているのではないか。

・いつも周囲の人の価値観で行動をしているのではないか。

○今後に向けて

T児は、お母さんや３人の兄の影響を強く受けて育っている。そのためか、自分の考えより、周囲の人の考えや価値観に左右されながら行動していることが多い。また、言葉での理解が先に立ち、やりもしないで判断を下したり、決めつけたりすることがある。

今後、本事例のような場面では、なぜ、そうするのかを考えられるように問い返していきたい。なぜ、そうなのかと考える経験を増やすことで、自分でも理由付けをしながら自分の思いで行動できるようになるのではないかと思う。

事例４「使いたいんだったら、『今、使いたいから後でね』って言ってもいいんだよ。」
４月１９日（火）

午後、視力検査のあと、年長組がプレイルームで遊んでいた。E児がフープで遊んでいた。T児が貸してと言ったところ、E児は自分が遊びたいにも関わらず、T児に貸した。やはりフープで遊びたかったE児はほし組担任に訴えた。

ほし組担任「T児くん、E児ちゃんが『T児君がフープをが持っていった』っていってるんだけど」
T児　「だって僕が「貸して」っていったら、E児ちゃん「いいよ」って言った」
ほし組担任「E児ちゃん、「いいよ」って言ったの？」
E児　「うん」
ほし組担任「そうか。E児ちゃんはいいよっていったんだけど、本当は貸すのが嫌だったんだね　T児くんがかしてっていっても『後で』って言ってもいいんだよ」
E児　「うん。T児くん、貸して」
T児　「うんいいよ」

T児はE児に言われて躊躇なく返した。

○T児の学び

・自分がしたいときはだめとかあとでと言って断ってもいいんだ。

・断っても理由がわかれば相手は嫌な思いをしないんだ。

○教師の学び

・T児はE児が断らないであろうことを予測してかしてもらおうとしたのではないか。T児にとっては、状況よりも相手が自分にとってどうであるかということが判断基準なのかもしれない。

・E児から断られるという経験をすることによって、T児も断ることを学んでいくのではないか。

・T児が貸したあとに、「T児も嫌なときには理由を言って断ってもいいんだよ。」とE児の行動を自分自身にもあてはめることができる声をかける必要があった。

○今後に向けて

今回の事例でも、T児はやはり教師の指示に疑問も持たずに従っている。簡単に自分の主張を引っ込めそうになったときには、「それでいいいの？」「本当はどうなの？」「顔にはいやだって書いてあるよ。」と声をかけたり、決める前に間を持たせたり、決めたあとに揺さぶりをかけたりして、自問自答する場面をつくっていきたい。

事例５「おかあさんが言ったから」　６月２１日（火）

わくわくワールド（宿泊体験）に向けての活動が始まった。まず、グループのリーダーを決めることになった。それぞれのグループに分かれての話し合いが始まった。青グループは、T児、C児、F児・G児・H児・G児である。

養護教諭「リーダーになりたい人？」
T児　「ぼくなりたい」
養護教諭「T児君、どうしてリーダーになりたいの？」
T児　「だっておかあさんがいったから・・・」
みんな　「・・・・・・」
養護教諭「それでいいの？みんなは？」
C児　「ぼく、なりたい」
養護教諭「どうして？」
C児　「オリエンテーリングのとき、ぼく先頭になって歩きたい」
養護教諭「みんなどう？」

そこへ担任教師が他のグループから青グループの様子を見にきた。

F児　「どっちが多いか聞いてみよう　T児くんがいいと思う人」

教師が側で数えると４人挙手している。

F児　「C児くんがいいと思う人」

F児を含めて３人挙手している。でも子どもたちは多数決をあまり理解していないようで、手は挙げたものの数を数えている様子は見られない。

G児　「ううん、決まらないねえ」
教師　「えっ？今決まらなかった？」
みんな　「うん」
F児　「もう１回ゆってもらって決めよう」
みんな　「うん」
T児　「ぼくもオリエンテーリングで先頭歩きたい」
C児　「ぼくは、オリエンテーリングで道に迷わないようにする」
F児　「T児くんがいいと思う人」（なぜか、人数がかわって２人挙手している。）
F児　「C児くんがいいと思う人」（再びF児を含んで５人挙手している。）
F児　「じゃあC児くんにきまり」
教師　「それでいいの？」
みんな　「うん」

T児の気持ちがどれだけ強いのか確認をするために、T児の顔を見た。

教師　「T児くん本当にいいの？」
T児　「うん」

T児の表情は残念そうだが、強い気持ちが感じられなかったので、そのままC児が青グループのリーダーになった。

○T児の学び

・お母さんに「リーダーになりなさい」と言われたけど、それではリーダーにはなれないんだ。
・ちゃんと理由がなければみんなはわかってくれないんだ。

○教師の学び

・T児のお母さんは、T児によかれと思っていろいろな指示をしている。
・T児はお母さんに言われたことは、素直に聞き、行動しようとしている。
・T児も「お母さんが」と言う理由ではよくないと気づくことができた。
・T児は、どうしてもリーダーをしたいという気持ちではなかったようだ。
・T児は自分がしたいというよりも、人に言われて行動したり話したりすることが多いようだ。

○今後に向けて

T児は人の指示や思いで行動することが多いようなので、自分の考えで行動できるように援助していく必要がある。その一つとして、T児に常にどうしてと問いかけていくことが必要だと考えられる。またT児の「これをしたい、これだけは譲れない」というものがあまり見えてこないので、今後の遊びや生活の中で、T児が大事にしたいものは何なのかを見つけて、励ましていくことが必要だと思う。

リーダーになったC児はその後、自分がなりたくてなったという責任からか、自分で考えて行動する姿が多く見られた。反対にT児はリーダーでないことから、前とかわらない行動だったので、今後、T児にも責任のある仕事を与え、自分が必要とされていることを感じさせていくことが必要だ。

事例6－①「痛くないよ」　6月30日（木）

T児は3週間前の提灯行列で足にけがをし、完治していない。この3週間、本人が幼稚園で「痛い」と訴えることは一度もなかった。わくわくワールド（宿泊体験）の前日の朝、お母さんが話しかけてきた。T児はお母さんのそばで立っていた。

T児母　「明日のオリエンテーリング、痛そうだったら無理をさせないでください　グループのお父さん先生にも、さぼってるんじゃないこと伝えてください」

しかし、教師は、T児が自分で伝えることが大事だと思ったので、T児に自分で伝えることを勧めた。

教師　「わかりました。でも自分が伝えることが大事ですね。T児君、痛かったら我慢せずに自分で言うんだよ」

T児　「痛くないよ」

T児は平然した顔で答えた。

事例6－②「痛くないよ」　7月1日（金）

わくわくワールド当日。オリエンテーリングのあと、体育館でリレーをすることになった。T児は膝にサポーターをしている。いつもお風呂に入ったあと、寝るときに湿布がずれないようにサポーターをしているらしい。この日はオリエンテーリングで雨に濡れ、もうお風呂に入ったあとなので、サポーターをつけてリレーに参加することにしたようだ。しかしサポーターが大きすぎてずり落ちてきた。お父さん先生がT児に話しかけ、T児がサポーターを外した。それを見て、教師は何気なく近寄った。

教師　「T児君、サポーター外したの」

T児　「うん」

お父さん先生「走っていると下がって危ないので、T児君にきいたら『大丈夫』っていうから外しました」

教師　「T児君、痛いときにはお父さん先生か先生に言えばいいよ」

T児　「痛くないよ」

教師　「そうか　強いね。T児は」

そう言って頭をなでたが、T児はにこりともしないで、平然とした表情で答えた。

○T児の学び

・お母さんは心配してたけど、大丈夫だった。

・サポーターを外しても痛くなかった。

○教師の学び

・T児ははじめはお母さんの指示の通りに行動したが、自分で痛さを確認することで、自分の意思で行動できるようになる。

・お母さんは、良かれと思って先へ先へと行動している。

○今後に向けて

足のけがを通して、痛さなど皮膚で感じるものは本人しかわからないものだということをT児は感じることができたのではないかと思う。自分で判断せざるを得ない状況として、痛さや寒さなどは最もわかりやすい場面ではないだろうか。先へ先へ援助するのではなく、判断を下すときに必ず、T児はどうなの？と本人に返していくことが今のT児にとっては大切である、また、それを「T児くんはこう言ってますが」とお母さんにも返し、判断をT児に委ねる機会を増やすように働きかけることも忘れてはならない。

事例7「ぼく6歳だから」　7月1日（金）

わくわくワールド（宿泊体験）1日目。夜ご飯のあと、足のけがの内服薬を飲む時間になった。いつもは、お母さんがゼリーを容器に入れ替えて、その中に薬を入れて飲ませてくれるらしい。お母さんがいうには、T児はゼリーを容器に上手く入れられないらしい。

養護教諭「自分で入れてみよう」

T児に自分でゼリーを入れるように促した。T児は自分でちょうどよく入れることができた。

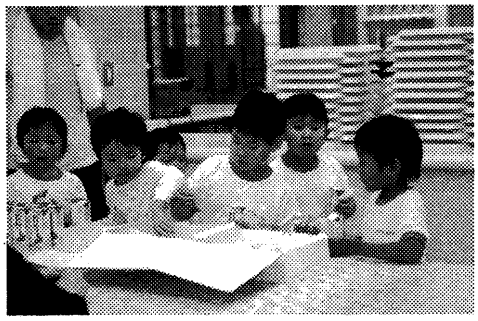
続いて、その中にT児に薬を入れさせた。

養護教諭「T児君、自分で入れられたね」
T児　　「うん・・・・・」
養護教諭「・・・」

しばし沈黙があった。T児が飲ませて欲しそうな表情になったので、養護教諭は、きっといつもお母さんに飲ませてもらっているんだろうと予測し、自分で飲むように促した。

養護教諭「飲んでいいよ」

T児は仕方なさそうに、自分で飲んだ。養護教諭は笑顔で声をかけた。



養護教諭「飲めたね」
T児　　「うん」

うれしそうにみんなの部屋へ戻っていった。次の朝、薬を飲むとき、養護教諭はT児に声をかけた。

養護教諭「今日は、ゼリーを使わないで飲んでみる？」

昨日のことで自信をつけたのか、T児は水だけで薬を飲むことができた。自分で薬が飲めた話を養護教諭から聞いた担任は、T児に声をかけた。

教師　　「T児くん、自分でお薬、飲めたんだって？」
T児　　「うん。大丈夫だよ　だってぼく6歳になったんだから」
教師　　「苦くなかった？」
T児　　「大丈夫だよ」
教師　　「お兄ちゃんになったね　おかあさんにも言ってあげるといいよ　おかあさんも喜ぶよ」
T児　　「うん」

T児はこれまでにない晴れやかな表情を見せた。

○T児の学び

・今までお母さんに飲ませてもらっていた薬も自分で飲めるんだ。

・６歳になったら、できることがふえた。

○教師の学び

・Ｔ児は今までかなり多くのことをお母さんに手をかけられてやってきている。

・やってみたらできたということが、Ｔ児の自信につながりそうだ。

・Ｔ児は６歳になったのでがんばろうと思っている。

○今後に向けて

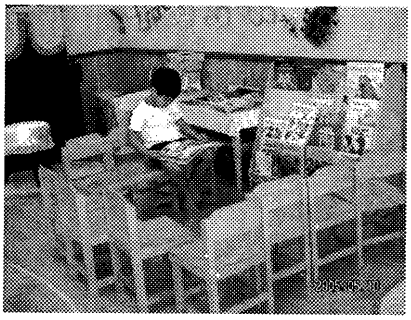
宿泊体験と自分の誕生日が重なったことで、Ｔ児は新しいことに挑戦し、それが自信につながった。今後も、新しいことに挑戦して、「自分でできた」という経験をふやしていくことができると思う。

また、本事例では、宿泊体験を通して、家での生活ぶりがわかり、園での経験が家庭生活にも影響を与えることになった。今後、幼稚園で頑張っている姿をお母さんにも伝えて、おうちでもＴ児にいろいろなことに挑戦させるように促していきたい。そうすることによって、Ｔ児のからだでの学びが家庭にも広がっていくと期待できる。

新しいことに挑戦していけば、失敗することも多くなると思われるが、失敗したときこそ学びのチャンスだということをお母さんにも伝え、家庭と連携してＴ児の世界を広げられるように取り組むことが必要だと思われる。

事例８「暑いんだよ」　　６月１７日（金）

天気の良い日。みんなは元気に外でそれぞれ遊んでいる。教師はおみくじ泥ダンゴをつくって遊んでいた。ふと見ると、Ｔ児が、テラスに寝転がっている。



教師　「Ｔ児君どうしたの」

Ｔ児　「暑いんだよ」

教師　「暑いねえ」

教師は、熱でもあるのかと思って、おでこを触るが熱はなさそう。外の遊びに興味がもてていないのだと思い、外の遊びに誘った。

担任　「今、おみくじ団子作ったからおいでよ」

Ｔ児　「・・・・」

教師は、気の進まなそうなＴ児の手を引いて赤土山へ行った。１０個の泥ダンゴが並べられていた。中に２個だけ石が入った泥ダンゴがある。

教師　「どおれだ？」
T児　「これ」
教師　「あけてみて」

T児、やる気なさそうに、指先でちょこちょこっと突っついてあけた。

教師　「はずれえ　もう１回チャンスがあります」
T児　「じゃあこっち」
教師　「あたり！商品は幼稚園特性の泥ダンゴです」

T児の手に泥ダンゴをのせた。しかし、T児はそれを置いて、手洗い場に行ってしまった。その後、手をきれいに洗って再びテラスの日陰で座って過ごした。

○T児の学び

・外は暑くて疲れる。泥は手が汚れて気持ち悪い。でも洗えばきれいになる。

○教師の学び

・T児は、外で体をいっぱい動かす遊びはあまり好きではない。外での遊びを楽しんだ経験が少ないのかもしれない。
・T児は素直なので、誘えばくるが、楽しくないときはそこで我慢するようなことはしない。

○今後に向けて

皮膚感覚を研ぎすましていくうえでも、外での遊びは欠かせない。特にT児は家では室内の遊びが多いと聞く。外での遊びを自分から楽しめるようになるためにも、どの遊びならT児が自分から入っていけるのかを見つけて、援助を考えていきたい。特に、M児とは気が合い、場を共有して遊べるので、まずは、M児が遊んでいるところにT児を誘って外遊びの経験を増やして、外遊びの楽しさを味わわせていきたい。

事例９「ぼくもつくったよ　いっしょに」　７月８日（金）

したい遊びの時間、L児とM児とT児が３人でシソとヨモギをすりつぶして遊んでいた。昨日までは、絵の具の色水を混ぜてジュース屋をしていたが、今日は、K児がシソの葉を持ってきたので、それをすりつぶして遊ぶことにしたようである。片づけの時間には、ジュースをプラスチックのコップに入れて、テラスの観察台に置いた。したい遊びの時間が終わったあとの牛乳タイムのことである。

教師　「今日何が楽しかったかお話きかせて」

L児　「ちょっととってくる」

T児といっしょに遊んだL児は、シソとヨモギをすりつぶしたジュースを見せようと立ちあがった。それを見たM児も「ぼくも」と言ってうれしそうに出ていく。その姿を見たT児も「ぼくもいっしょにつくったよ」と慌ててついていった。３人がジュースの入ったコップを持ってみんなの前に立った。

L児　「今日はシソのはっぱをすりつぶしてジュースを作りました。いいにおいがします。ハーブ（ヨモギ）のジュースも作りました」

３人でジュースを持ってみんなににおいをかかがせて回る。においをかいだ子らが口々に「いいにおい」「においする」と話すとT児はうれしそうな顔になった。見せ終わった３人はにこにこしながらテラスに置きにいった。

○T児の学び

・M児くんとL児ちゃんと外で遊んでいたら、楽しかった。
・絵の具の色水はにおいはしなかったけど、葉っぱを使うとにおいもあっておもしろいな。

○教師の学び

・T児はとても素直に喜びを表現できる。
・T児は植物のにおいを感じて楽しめる子だ。
・T児は友達といっしょに遊べたことが楽しかったようだ。

○今後に向けて

今までは自然物に自分から働きかけることが少なかったT児が自分から楽しそうに遊んでいた。やはり、T児はM児といることで安心して遊びを楽しめるようだ。しかもL児という新しい仲間がいてもかかわりをもつことができた。普段あまり表情に変化のないT児だが、本当にうれしそうな表情だった。違う花や草などを用意したり、子どもたちに呼びかけて素材にバラエティを持たせて、このジュースごっこが続くように働きかけたい。

事例１０「毛虫は冬眠してるんだよ」　７月１２日（火）

園庭で、T児、J児、C児が虫を捕まえていた。J児とC児は次々にショウリョウバッタとカマキリを見つけて、素早く捕まえるが、T児はなかなか捕まえられなかった。

J児　「そこにこのまえ、毛虫おったよ」

C児　「ふうん」（C児は毛虫を探す。）
C児　「でもいないよ」

二人がその場を離れようとしたとき、T児は二人に話しかけるように言った。

T児　「毛虫は冬眠してるんだよ」

二人は聞いていないのか反応せずにその場を離れた。T児はそのまましゃがんでいた。教師はその姿を見て、T児がJ児とC児にかかわろうとしている姿がいじらしくなって、近寄ってしゃがんで話しかけた。

教師　「T児くん、冬眠ってどんなこと？」
T児　「土の中でねむってることだよ」
教師　「ねむってるのはそうなんだけど、冬眠っていうのは冬に長い間ねむってることなんだよ」
T児　「・・・・」
教師　「だから冬眠ではないんだよ」
T児　「・・・・」

離れていくJ児とC児を見て、慌ててT児も２人に近づいていった。そのあともずっとT児は２人からはなれないで虫取りをしていた。J児とC児は、カマキリを捕まえるが、T児には捕まえられなかった。そのうち、T児はダンゴムシを捕まえて急ぎ足で教師に持ってきた。

T児　「ダンゴムシつかまえたよ」
教師　「ほんとだ　ダンゴムシだね　T児くん、ダンゴムシ好き？」
T児　「好きだよ　くすぐったいよ」（うれしそうに教師の手に乗せた。）
教師　「くすぐったいね」

○T児の学び

・冬眠は冬に眠っていることだ。
・J児とC児は虫を捕まえるのが上手い。
・先生はダンゴムシも喜んでくれる。

○教師の学び

・T児は虫を捕まえるのはあまり上手くない。そのことをT児もわかっている。それを見透かされないようによくわからない「冬眠」と言う言葉をつかって、自分を大きく見せよう

としているのかもしれない。

・T児は、虫取りが本当に好きなわけではないけれど、友達の中に入ろうと虫取りをしているのかもしれない。

○今後に向けて

友達とかかわりたいという思いのもとでT児は虫取りをしているように思われる。シソジュースでL児と遊べたことが自信になって、何か遊びを介することで友達関係を広げたいと思っているのかもしれない。今後もT児が友達とかかわろうとしている姿を見逃さずに、援助していきたい。なかなか、自分からは会話に入れないこともあるので、遊びを共有しながらT児にも話題を振ったり、T児が話す間をつくったりしていきたい。

～T児の事例を通して見えてきたこと～

○自分のからだで感じると自分で判断できる！

事例１から事例５では、自分で判断するのではなく、周囲の大人の考えに強い影響を受けて行動しているT児の姿が伺われる。特に母親の影響を強く受けており、母親からの指示通りに園でも行動しようとしている。また日頃の様子から、T児は知識先行でものを考えることが多いと感じる幼児であった。

そこで、少しでも自分のからだを通して感じて、自分で判断できるようになって欲しいと思い、下記のような手だてを講じてきた。

・運動着に着替えて、自分の「からだ」で寒さを確かめさせる（事例１）。

・紙に頼らず、自分で台詞を覚えて言わせてみる（事例２）。

・理由を言って断られる経験をさせる（事例４）。

・お母さんが言ったからという理由では、周りは納得しないことを経験させる（事例５）。

・実際に走って足が痛いかどうかを確かめさせ、自分でどうするかを考えさせる（事例６）。

このような体験を積み重ねることで、徐々に自分の「からだ」で感じた痛さや寒さを基準にして判断し、行動しようとする姿が見られるようになってきた。

さらに、わくわくワールドの宿泊体験では、今まで母親にしてもらっていた薬のゼリーづくりをやめ、ゼリーなしで飲むことに挑戦させた。今まで自分では無理だと思っていたことが自分ででき、大きな自信となったようである（事例７）。

このようにプラスの学びやマイナスの学びの両方の体験を積み重ねて、T児は自分のからだで感じ、少しずつ自分の考えで判断し行動できるようになってきたように思われる。

しかし、事例７の宿泊体験のゼリーづくりからは、T児が自分でできることにも家庭ではかなりの手が貸されていることも伺われた。

○仲のよい友達をきっかけに外遊びや仲間づくりへ！

T児は外でダイナミックに遊ぶことがあまり好きではなかった。また、友達と一緒に外に出

て遊ぶことはあっても、自分から興味をもって遊ぶことも少なかった（事例８）。しかし、仲のよい友達M児と一緒にシソとヨモギをすりつぶしてジュース遊びをすることで、植物を使った遊びの面白さに気づくことができた。そのとき、シソジュースを媒介にして、L児という新しい友達とも遊べたことが、外での遊びの楽しさを倍増したようであった（事例９）。その楽しさからか、その後は、自分一人でも外に出て、同じ組の幼児らと遊ぼうとする姿が見られるようになった。決して虫取りが得意なわけではないが、友達に懸命にかかわろうとするT児の姿がいじらしく感じられた（事例10）。

これらのように、T児は少しずつではあるが、新しい友達と遊んだり、外で自然の草花や生き物に触れて遊んだりする楽しさを感じ始めているようである。そのきっかけとして、仲のよい友達M児と一緒に外で遊んだことは大きな役割を果たしているといえよう。しかし、まだまだ友達へのかかわり方がわからなかったり、他の幼児のようにダイナミックにからだを動かして遊ぶことが少なかったりするT児に対して、不安な胸中を和らげるためにも、教師は側にいてまるごと受け止め自信をもたせることが必要だと考えている（事例10）。

○今後に向けて

園生活の中で様々な体験をし、自分の「からだ」で感じ、判断し、友達とかかわることの楽しさを感じ始めたT児。今後はさらに、自分の「からだ」で感じたものをベースにして判断できるようになってほしい、そのために四つのことを心がけていきたい。

一つ目は、家庭との連携である。宿泊体験からもわかるように、母親はよかれと思い、先へ先へと行動し、T児のからだでの学びや判断する場を奪っている面が見られる。そこで、母親にT児の成長を気づかせ、T児に判断させる機会を家庭でも増やせるように、T児が園での遊びや友達とのかかわりの中から何を学んでいるかを伝えていきたい。

二つ目は、自分の判断にT児なりの理由をもたせる援助である。「なぜ、謝らなければならないのか」「なぜ、今は遊び道具を貸してあげられないのか」自分なりの理由をもてるようにしなければ、周囲の人の価値観で行動を繰り返すことになってしまう。「なぜ」と問い直すことで、T児も自分の経験を生かして判断をしたり、立ち止まって自分で考えたりする機会になるのではないかと考える。

三つ目は、T児本人に自信を持たせる援助である。T児は新しい仲間と遊ぶことの楽しさを感じ新しい仲間の中に自分から入ろうとし始めている。しかし、兄や本からのうけうりを一方的に話すことが多い。それは、どうかかわっていけばいいのかわからなかったり、自信のなさの裏返しだったりする行動だと思われる。今後はT児が自己肯定感を持ち自信を持って生活していけるように、T児の小さな変化を見逃さずに、受け止めていきたい。また、その変化を他の幼児にも広げ、互いによさを認め合える仲間づくりを心がけていきたい。

四つ目は、行事などのいつもと違う活動を生かしていということである。事例７のように、行事には、自分で新しいことに挑戦できるチャンスが様々な形で埋もれている。それを体験させることは、T児なりにからだで感じ、自分で判断するもとを形成していくと考えられる。